



Essenz Philharmoniker

エセンツ・フィルハーモニカー

第4回定期演奏会

2024. **2.4** SUN 13:30 開演

なかのZERO 大ホール

# ごあいさつ



©Takashi Fujimoto

標題音楽です。

「パリアメ」の華やかな雰囲気浸ったあとは一気に雰囲気が変わり、ショスタコーヴィチの世界をお届けします。ショスタコーヴィチ初挑戦の団員も多く、前半はその独特のクセに苦戦(?)しましたが、平均年齢の若いエッセツはみるみると適応していき、その成長具合を感じられたのも今回の大きな収穫かと思います。ショスタコーヴィチの中では編成も小さくコンパクトにまとまっている印象の交響曲第9番ですが、曲の中身は非常に濃く、「アンサンブル」と「ソリストティック」が上手い具合に共存した大変な名曲です。各種ソロプレイヤーにもご注目ください。

最後にお届けするのはラフマニノフの交響曲第3番です。演奏回数が圧倒的に多い交響曲第2番やピアノ協奏曲第2番で有名なラフマニノフですが、今回あえて交響曲第3番を演奏するのは、この曲がどうしてもないくらいに大変な名曲であるからです。第2番からは30年ほど作曲時期が離れており、母国のロシアを出てアメリカに移住した後の作品となります。後期作品に見られる派手さがありつつ、前期作品特有のロマンティックさも顔を見せる素敵な交響曲です。もちろんファンが多い(はずの)曲ではありますが、なかには初めてこの曲に触れるお客様もいらっしゃるかと思います。そのような方に少しでも「良い曲だな」と思っただければそれ以上のことはございません。

ガーシュウィンとショスタコーヴィチ、それをつなぐラフマニノフと、それぞれの特徴を存分に表現しつつ、しかし我々としてはチャレンジングな今回のプログラムをどのような形に仕上げられるか、エッセツのどんな一面をお見せできるか、挑戦者の立場としても非常に楽しみです。

どうぞ、最後までごゆっくりとお楽しみください。

本日はエッセツ・フィルハーモニカ-第4回定期演奏会にご来場いただき、誠にありがとうございます。

過去4回の演奏会(特別公演含む)でベートーヴェン、ブルックナー、マーラーなどドイツ、オーストリアの交響曲を演奏してきた我々は、「今までのエッセツに無い音楽にチャレンジ!」ということで、今回初めてドイツ語圏を脱します。さよならベートーヴェン、ごめんねブルックナー、また絶対戻ってくるからねマーラー、というわけです。

まず一曲目に演奏しますガーシュウィン「パリのアメリカ人」、こちらは言うまでもなく大変な名曲であり、団員の間でも人気の高い曲の一つです。オーケストラでは珍しいサクソパートが入り、華やかやゴージャスといった言葉がピッタリのとてもおしゃれな

委員長 清水 颯太

## Program

### ガーシュウィン パリのアメリカ人

### ショスタコーヴィチ 交響曲第9番

- I. Allegro
- II. Moderato - Adagio
- III. Presto
- IV. Largo
- V. Allegretto

— 休憩 (20分) —

### ラフマニノフ 交響曲第3番

- I. Lento - Allegro moderato - Allegro
- II. Adagio ma non troppo - Allegro vivace
- III. Allegro - Allegro vivace - Allegro (Tempo primo) - Allegretto - Allegro vivace



©Takashi Fujimoto

## エセンツ・フィルハーモニカー

2020年、一橋大学管弦楽団の若手OB・OGを中心に結成。「とにかく楽しくやろう!」をモットーに年一回の頻度で演奏会を開催。これまでにベートーヴェン、ブルックナー、マーラーなどドイツ、オーストリアの交響曲に精力的に取り組んできた。今回は創設以来初となる3曲プログラムかつドイツ語圏以外の作曲家のみの演奏となるため、新しいエセンツ・フィルにも注目いただきたい。団名に冠したエセンツ(独語:Essenz)は「本質・真髄」といった意味を持つ。



©Takashi Fujimoto

### 齊藤 栄一 指揮 Saito Eiichi Conductor

京都大学にて音楽学を、国際基督教大学大学院にて美術史を研究。この間、指揮法を尾高忠明、田中一嘉、円光寺雅彦の各氏に師事。1981年には京都大学交響楽団と2週間にわたり、ドイツ、オーストリアにて演奏旅行を行い、ザルツブルク音楽祭などにて指揮。

82年には関西二期会室内オペラ・シリーズ第9回公演、ブリテン作曲『ねじの回転』(関西初演)の副指揮者を務める。84年には、一橋大学管弦楽団の出身者を中心に結成された水星交響楽団の常任指揮者に設立当初から就任。現在に至る。水星交響楽団、オルフ祝祭合唱団との共演で、佐多達枝振り付けのバレエ『カルミナ・ブラーナ』(95

年、東京文化会館)、『ダフニスとクロエ』(99年、新宿文化センター)を指揮した。その後、『カルミナ・ブラーナ』のバレエ公演では、神奈川フィル、東京シティ・フィルも指揮している。2005年には、同曲を含むオルフの『トリオンフィ』3部作(4台のピアノと打楽器版に自ら編曲)を指揮している。

また、作曲・編曲も手掛け、一橋大学管弦楽団創立100周年記念委嘱作品の『前奏曲』、『スーダラ節の主題による交響的変容』などの管弦楽曲のほか、『シンフォニエッタ』(金管十重奏曲)、『ミサ・ブレヴィス』(無伴奏合唱曲)、バーンスタイン作曲『ウエスト・サイド・ストーリー』より『もうひとつのシンフォニックダンス』、TVアニメーション『赤毛のアン』エンディングテーマの三善晃作曲『さめない夢』の管弦楽版などがある。

明治学院大学名誉教授。著書に、『往還する視線－14-17世紀ヨーロッパ絵画における視線の現象学』(近代文芸社)、『振っても書いてもしょせん酔狂』(水響興満新報社)がある。

## ガーシュウィン パリのアメリカ人



### 1. ガーシュウィン、パリへ行く

ジョージ・ガーシュウィン(1898-1937)は『ラプソディ・イン・ブルー』に代表されるように、ヨーロッパのクラシック音楽にジャズやアメリカのポピュラー音楽を取り込み、お堅いクラシック音楽のコンサートに新鮮な風を送った。青年期にポピュラー楽曲のライター兼ピアニストとして名を揚げたガーシュウィンは、クラシック音楽の作曲術を独学で身に付け、1924年に『ラプソディ・イン・ブルー』、翌年に『ヘ調の協奏曲』を披露して当時の全米に名を轟かせた。そのユニークな才能は、彼が敬意を抱いていたラヴェル(代表作:ボレロ)やストラヴィンスキー(代表作:バレエ音楽『春の祭典』)をもってしても「あなたは既に自分自身の音楽を創っている、私から教えることなど何もない」と評され、作曲の師事を拒まれた逸話が残されている。

『パリのアメリカ人』はそんなガーシュウィンが1928年(当時30歳)にヨーロッパ、とりわけパリ滞在時の体験を自由に描いた作品である。「アメリカ人がパリを訪ね、様々なものを眺め、様々な音響を聴きながら街通りを歩いて、フランス首都のエッセンスを吸収する様子を描いた」と本人が述べるように、アメリカ人ガーシュウィンが異郷の都パリで五感に受けた刺激が、多彩な楽器と溢れんばかりの楽想によって表現されている。どのくらい多彩かと言うと、通常オーケストラに組み込まれないサクソフォンが活躍するのは勿論だが、よほど印象深かったのかパリを走るタクシーのクラクションを楽器として用いる具合である(ガーシュウィンはアメリカでの初演にあたり、「本場」のクラクションを複数買い込んでヨーロッパから戻った)。

本作品は自由ながら大まかに「急 - 緩 - 急」の3部で構成される。第1部は行進曲風の楽想で、アメリカ人がパリの街を歩いてゆく様子を表しているとされる(タクシーのクラクションが随所で鳴らされるのがその証左だろう)。次にAndanteのテンポで始まる第2部。ミュートをかけたトランペットが歌い出す旋律は、作曲者本人によれば「アメリカ人がカフェにでも入って落ち着いた時、ふと胸に湧いてきた故国へのノスタルジー」



1900年代パリの女性タクシー運転手。写真左下の「これ」ならガーシュウィンもアメリカへ持ち帰れると思っただろう。完全に余談だが東京デイトニーサーの園内をゆっくり走る自動車にもよく見ると取り付けられている。

を表している。第3部はAllegroのテンポでノリの良いダンス風の楽想となり、最終的には「ノスタルジー」の旋律が彼のアイデンティティを誇示するように高揚して締めくくる。

### 2. 二次創作としての『パリアメ』



映画『パリのアメリカ人』(1951年製作)

ヨーロッパから帰国したガーシュウィンは、舞台音楽やハリウッドでの映画音楽を手掛けるなど順調に活動の場を広げていった。しかしその矢先の1937年7月、ガーシュウィンは脳溢血のため昏倒しそのまま帰らぬ人となってしまった。僅か38歳で没した彼の葬儀は当時の滞在先であったロサンゼルスに加えてニューヨークでも催され、アメリカ楽壇に現れた才能溢れるスターの早世を惜しんだ。

彼の死後、『パリのアメリカ人』は映画やバレエ、ミュージカルといった様々な形で現在でも多くの人々に親しまれている。しかし前述のように本楽曲はガーシュウィン自身のパリ紀行を音楽にした作品であり(交響詩と冠されることもある)、特定の脚本を元に作曲された訳ではない。現在の「二次創作」全



ての原点となったのは1951年製作のミュージカル映画『巴里のアメリカ人』である。本映画は全編の音楽を『バリアメ』のみならず協奏曲やポピュラー楽曲といった彼の作品で構成しており、その歌詞は兄アイラ・ガーシュウィン(1896-1983)が手掛けている(アイラは作詞家として高名で、弟と二人三脚でポピュラー楽曲を製作してきた)。また主人公の友人であるピアニスト、アダム役を務めるオスカー・レヴァント(1906-1972)はガーシュウィンの親友であり、彼もまた当時のアメリカで絶大な人気を持つピアニストであった。本映画のあらすじを以下に紹介しよう。

画家としての成功を夢見てアメリカからパリへやってきた青年ジェリーは、ピアニストのアダムや歌手のアンリら友人たちと楽しい日々を過ごしていた。ある日、ジェリーの個展にやってきた富豪の女性ミロが彼を気に入り、公私に渡るパトロンとなる。ジェリーはミロと一緒に訪れたキャバレーで、愛らしいパリ娘リズに一目惚れ。2人は恋に落ちるが、ジェリーはリズとアンリが婚約していることを知る――

本映画のハイライトは何と言っても、『パリのアメリカ人』が流れる中ジェリーとリズによって繰り広げられる終盤17分間のダンスシーンである。1952年のアカデミー賞で作品賞を含む6部門にも輝いた本映画。本日の演奏を聴いて『バリアメ』に興味を持たれた方はぜひ視聴をお勧めする。

(安西理玖)

#### 【参考文献・サイト】

濱田滋郎『パリのアメリカ人』(日本楽譜出版社)

巴里のアメリカ人: 作品情報

<https://eiga.com/movie/48137/>

ハリウッド映画にも出演した人気ピアニスト～オスカー・レヴァント録音集

[https://tower.jp/article/feature\\_item/2018/07/06/1112](https://tower.jp/article/feature_item/2018/07/06/1112)

#### 【画像出典】

<https://www.carnegiehall.org/Explore/Articles/2021/08/10/Carnegie-Hall-Premieres-Gershwin-An-American-in-Paris>

<https://www.unjourdeplusaparis.com/en/paris-insolite/madame-decourcelle-premiere-femme-taxi-paris>

<https://www.imdb.com/title/tt0043278/>

## ショスタコーヴィチ 交響曲第9番

### 1. 「第九」の特別性

「第九」と聞くと、何が思い浮かぶだろうか?クラシック音楽にそこまで馴染みの無い方も、ベートーヴェンの交響曲第9番、特に"歓喜の歌"のメロディラインを想起されるのではないだろうか。実は年末にベートーヴェンの第九を演奏するという風習は日本独自のものとも言われているが、交響曲を語る上でベートーヴェンの第9番が欠かせないのは全世界共通である。

18世紀、ハイドンやモーツァルトは何十曲も交響曲を作曲したが、19世紀以降、ロマン派の作曲家はベートーヴェンが第9番までで完成させた交響曲の形態を前提にした。そうすると、ひとつの交響曲を完成させるのに必要な時間は長大化し、10以上の交響曲を完成させることは困難になった。実際、ベートーヴェン自身も交響曲は第9番の後、第10番は未完になっている。ブルックナーは番号なし作品などもあるが、番号付きは第9番まで。ブラームスは第1番の作曲に時間を使い過ぎてしまい、第4番までしか書き上げられなかった。マーラーの頃には「第九のジグクス:作曲家は第9番を書く死亡する」がまことしやかに囁かれ、第8番の後の交響曲を「大地の歌」として第9番を忌避。その後、満を持して10曲目を「第9番」として発表したが、結局「第10番」が未完のまま死亡してしまい、奇しくも「第九のジグクス」立証に一役買う形となってしまった。

ジグクスはともかく(ショスタコーヴィチは第15番まで完成させている)、ショスタコーヴィチの第9番もベートーヴェンの「第九」を意識していたことはほぼ確実である。しかし、それに触れる前に、ショスタコーヴィチが交響曲を作曲した当時の時代背景を見ておこう。

### 2. ソヴィエト政府による「音楽の国有化」

ドミトリー・ドミトリエヴィチ・ショスタコーヴィチ(Shostakovich, Dmitry Dmitriyevich)は、1906年9月、ロシア帝国の首都サンクトペテルブルク郊外で生まれた。ロシア国内は既に革命の機運に満ち、極めて混乱していたが、ショスタコーヴィチの天才的な才能は弱冠10代にして開花していた。グラズノフに「モーツァルト的才能」と評価されたショスタコーヴィチは、音楽院のピアノ科・作曲科へ通うことが出来た。そのころ、内戦及び列強による干渉戦争を経て、ソヴィエト政権が樹立するに至った。あらゆる農業・工業と同時に、劇場、演奏会場、音楽出版社、音楽院も全て国有化された。当時のロシア楽壇のトップにあった、ラフマニノフ、プロコフィエフ、ストラヴィンスキーらはソヴィエトへの隷属を逃れ外国へ脱出、多くはそのまま国外定住した。

初期主導者のレーニン、労働者・兵士に広くプロレタリア文化を浸透させることが共産主義イデオロギーの宣伝には不可欠と考え、文化啓蒙を重視した。中でも交響曲は、歴史を辿れば貴族文化やキリスト教的文化に端を発する、謂わばブル



ジョワ的な文化であるが、ソヴィエト政権はこれも文化啓蒙のラインナップに追加した。これにより、交響曲作家への道を歩み始めたショスタコーヴィチの人生は、否が応でも「ソヴィエト音楽家」といういばらの道にならざるを得なかった。

### 3. 「民衆の受容」と「当局の受容」

一般に、ロマン派以降の作曲家が自身の作品について関心を寄せるのは、「民衆の受容」である。人気の演奏曲目に名を連ねられれば、劇場の支配人や演出家等の仕事を引き受け、高い名声と経済的安定を手にすることが出来る。無論、民衆の反応は音楽批評家の評価によるところも大きいだろう。しかし、ショスタコーヴィチの場合、最大の批評家はソヴィエト当局であり、「民衆の受容」と同等かそれ以上に「当局の受容」を気にしなければならなかった。

大袈裟ではなく、当局に受容されるか否かが生死を分ける時代であった。実際ショスタコーヴィチの家族や友人、仕事仲間も大勢が投獄・粛清された。ショスタコーヴィチ自身も幾度となく危険な橋を渡っていた。最初に直接的な槍玉に挙げられたのは、前衛的なオペラ作品群である。彼のオペラを観劇したスターリンは、「社会主義建設の英雄的なロマンティシズムに反する」として途中で退席し、二日後の共産党機関誌には「音楽の代わりの支離滅裂」というタイトルの記事を発表、同オペラを名指して批判した。

一方で交響曲は、例外もあるが、言葉を持たず表題も持たない、絶対音楽であることが多い。従い、作曲家からすれば表立って権力におもねることが困難であったが、権力側はその効果を利用した。事実、当局はショスタコーヴィチを「ソヴィエトが誇る大作曲家」として仕立て、社会主義リアリズムに沿った表題解釈を民衆に与える発表を行った。「当局の受容」が「民衆の受容」を強力に統制したのである。これこそ、権力と芸術の危うい駆け引きである。

当局は、オペラへの批判に続き、交響曲第4番に対しては初演の撤回を迫った。一方で、後がなくなったショスタコーヴィチが発表した第5番には、「人格の形成：精神的危機を克服して革命的理想に目覚める主人公の成長過程」というキャッチフレーズを与え、これを絶賛した。同様に第7番「レニングラード」は、ファシズムたるナチス・ドイツに対するロシア民族の戦い、というシナリオに沿って各楽章の解説が作成された。あらゆる新聞にこれを転載して事前に周知したうえで、初演はラジオを通じてソ連全土に中継され、最終的にはスターリン賞第一席授賞に至っている。

### 4. 戦争三部作の中の交響曲第9番

華々しく国内外の名声を獲得した第7番に対して、第8番の評価はいまひとつであった。ナチス・ドイツとの激戦の最中、ようやく戦局が回復してきた段階での発表ながら、第8番は悲劇的で難解であった。当局は当初「スターリングラード交響曲」との副題を用意していたが、「第7番によって生み出された勝利の路線を継続せず、深刻な悪によって引き起こされた苦痛が克服されることもなかった。これは反革命、反ソヴィエト的であり、ファシストの味方を意味する」と断じた。

その後、ソヴィエト連邦は激闘の末、ナチス・ドイツに勝利を

収めた。当局は、ショスタコーヴィチの第9番に対して、勝利を称える大交響曲になること、即ちベートーヴェンの記念碑にならぶソ連版「歓喜の歌」となることを強く期待した。ショスタコーヴィチは、その期待に応える大合奏を書き始めたことを表明していたが、途中で突然これを放棄した。数か月後に作曲を再開すると、あっという間に第9番を完成させた。しかし出来上がった作品は、当局と民衆を啞然とさせた。それは、全くもって軽妙洒落で人を食ったような作品であった。演奏時間は30分にも満たず、室内楽を思わせるような2管編成であった。作品に引用や皮肉を散りばめる書法は、第9番以前から試みられていたものであったが、第9番はその極地であった。

楽章は急-緩-急-緩-急の5つからなる。第3楽章から第5楽章まではアタックで連続して演奏される。

#### <第1楽章；アレグロ、変ホ長調、2/2拍子>

古典的なソナタ形式のようで、その実はパロディである。軍隊行進を想起させるような2/2拍子で、トロンボーンが軍隊の如く号令をかけ、ティンパニやスネアドラムがリズムを作るが、続くピッコロの旋律は気が抜けるほどおどけている。途中、よけいな拍の追加や調子はずれでグロテスクな不協和音、ロシアらしいポルカ風のモチーフが登場するが、軽快なままあっさり終わってしまう。しかし、よく観察すると、冒頭の音型がハイドンのような分散和音に見えて、ベートーヴェン第9番冒頭の下降にも類似しているのは、意図的なものかもしれない。

#### <第2楽章；モデラート-アダージョ、ロ短調、3/4拍子>

一転してノクターン風の短調になる。クラリネットから始まる木管楽器群による陰影の強い幻想的な叙情詩は、ワルツの途中で吐息のような4/4拍子を挟む。弦楽器による主題の再現部ではホルンが重なる。再現部はフルートから始まり、最後はピッコロの長いロングトーンを弦の静かなピッチカートで閉じる。抑圧と戦火に怯える民衆の悲痛な叫びと捉えるのは飛躍であろうか。

#### <第3楽章；プレスト、ト長調、6/8拍子>

息をつく間も与えない、猟奇的とも言えるスケルツォ。疾走を続ける6/8拍子のまま、トランペットが全く異質の、勇壮ながら悲壮感も漂うスペイン風のフレーズを歌い上げる。打楽器や弦楽器が刻むリズムの正確さは、まるで銃撃戦を写実しているかのような生々しさがある。徐々にリタルダンドしてラルゴへ繋がる。

#### <第4楽章；ラルゴ、変ロ長調、2/4拍子>

極めて短く、即興的な楽章だが、交響曲全体へ非常に重要なインスピレーションを与える楽章である。恐怖を煽るほど威圧的な金管楽器のファンファーレの後、ファゴットによる嘆くような、シリアスなモノローグ(独白)が続く。この構成も、実はベートーヴェン第9番の第4楽章を仄めかしているようでもあるが、あまりに切実な言葉を持たない訴えは、それに気づかせないようにしているかのようである。



## ＜第5楽章；アレグレット、変ホ長調、2/4拍子＞

引き続きファゴットソロの途中から始まる楽章だが、その表情は一変する。「弔辞を読み上げていた熱情的な弁士が、急にいたずらっぽく目配せして、笑みを誘う喜劇俳優に変身する」との評もある。まるで第4楽章の慟哭を嘲笑うかのようである。そのまま、ユダヤ民族音楽風の主題に移る。ソヴィエト当局がこの当時から反ユダヤ的姿勢を取っていたことを考えると、これも不興を被ったのかもしれない。そのまま加速し、グロテスクなほど陽気なスケルツォを続けて淡々と曲が途切れてしまう。全く拍子抜けな終わり方である。

戦後、以前にも増して大規模で厳格な文化芸術統制が敷かれると、第9番は第8番と並んで批判の対象となった。その後スターリンが没するまでの間、ショスタコーヴィチが次の交響曲を発表することは無かった。しかし、フルシチョフによるスターリン批判後は再び旺盛に交響曲を作曲し、最終的には共産党へ入党させられ、ソヴィエト連邦、ひいては東側諸国における芸術文化振興の顔役として大量の勲章を携えながら、死の直前まで世界中を飛び回る人生を歩いたのであった。

## 5. 『ショスタコーヴィチの証言』

ショスタコーヴィチの死後発表された『ショスタコーヴィチの証言』では、第9番について以下のような本人による告白が残されている。

“周囲のすべての人々は、スターリンを賛美し、そしていま、わたしもまたこの忌々しい事業に加わるものと期待された。ましてや、第9という数字はスターリンにふさわしいものと思われた。

白状すると、指導者に夢を与えたのはわたしだった。わたしは賛歌を書いていると公表していたのだ。このことについては明言を避けたいと思っていたが、そうはゆかなかった。

わたしの第9番が演奏されたとき、スターリンはひどく腹を立てた。彼は自分の最良の気分を傷つけられたのだが、それは合唱もなければ独唱もなく、賛歌もなかったからだ。しかも自分に対するわずかばかりの言及さえもなかった。スターリンにはよく理解できない音楽と、疑わしげな内容があるばかりだった。

結局わたしはスターリンを神格化する曲をかけなかった。全くできなかったのだ。第9交響曲を書いていた時、自分が何に向かって歩いているかを私は知った。”

さらに言えば、第7番「レニングラード」について、フィナーレを書き終えた後にショスタコーヴィチ自身が隣人と交わした会話として、以下のような記録が公開された。これらの情報は、ゴルバチョフによるグラスノスチ(情報公開)以降で初めて明らかになったものである。

“もちろん(第7交響曲の念頭にあるのは)ファシズムさ。だけど、音楽が、本物の音楽が、ある主題に文字どおり結びつけられることなど、絶対にありえない。国家社会主義というのは、ファシズムの一形態に過ぎない。この音楽が語ってい

るのは、テロル、隷属、社会的束縛のすべての形態についてなんだ。この件にかんしては第7番も第5番も同様に、ファシズムについてというより、われわれのシステム、あるいは、あらゆる形態の全体主義的体制について語っているんだよ。”

ショスタコーヴィチは祖国ロシアを敬愛していた。だからこそ、全体主義的体制が許せなかった。作品の持つ批判的姿勢は、ファシズムを名指しているように見えて、隷属を求めるあらゆる体制を対象としていたのであろう。当局が絶賛した第5番、第7番も、拒絶した第4番、第8番、そして第9番も、結局根底にあるものは同一だったのではないだろうか。西側諸国では長きにわたって「ソヴィエトに恭順する作曲家」という評価の多かったショスタコーヴィチだが、いまとなつては「巧みな二枚舌作曲家」との表現でさえ存在する。一方、『ショスタコーヴィチの証言』それ自体が偽証であるとの論説や、仮に偽証でないとしても「二枚舌」に踊らされているに過ぎず、真意からは程遠いとの指摘もあり、真相は最早誰も知り得ない。実際のところ、ある意味ではいずれも真実でもあり、また別の意味ではいずれも偽証であったのかもしれない。

## 6. 現代日本でショスタコーヴィチをどう聴くか

ショスタコーヴィチの死後49年経った。ソヴィエト政権は崩壊した。当時ファシズムを極めた大日本帝国は敗戦により解体されたが、その後ブルジョワ的な復興を遂げた。しかし残念ながら、未だに20世紀以前の対立構造は各所で継続しており、ロシアとウクライナの紛争も、パレスチナの紛争も続いている。今、我々がショスタコーヴィチ作品を前にするとき、これらのどうしようもない紛争に巻き込まれた民衆への鎮魂と、進展を見出すことのできないあらゆる社会体制への皮肉として、これを受け止めることも出来るだろう。

しかし、筆者はひとつ提案したい。遠大な国際関係論としてではなく、我々自身がある種無意識的に日々参加している、身近な隷属への内省として向き合ってみてはどうだろうか。現代に生きる我々は、仮に対外的には健康的で順風満帆に見えたとしても、学校や職場、家族や友人など様々な社会的連帯の関係性の中で雁字搦めに陥り、矛盾が生む歪みに苛まれ、心が悲痛な叫びをあげてはいないだろうか。ショスタコーヴィチは、そうした叫びに深いところで寄り添ってくれる。今回取り上げる第9番もただ単に政治体制を小馬鹿にした小曲ではなく、社会的軋轢に喘ぐ民衆の苦悩を内層に眠らせていたからこそ、スターリンはどうとうショスタコーヴィチを粛清出来なかったのかもしれない。

今日の演奏会では、自由な新形式の萌芽とも言えるガーシュウィン、ソヴィエトから逃れたラフマニノフの間に挟まれた、遅しきショスタコーヴィチによる「滑稽な第九」を、是非堪能頂きたい。

(山岸雄作)



人民義勇軍への入隊を拒否され、爆撃による火事から音楽院を守る消防隊に配属されたショスタコーヴィチ(1941年)

【参考文献】

千葉潤『作曲家◎人と作品 ショスタコーヴィチ』音楽之友社、2005年  
 帝国書院編集部『最新世界史図説 タベストーリー 十八訂番』帝国書院、2020年  
 寺原伸夫『ショスタコーヴィチ 交響曲第9番』全音楽譜出版社、1991年  
 Solomon Volkov (translated by Antonina W. Bouis), "Testimony-The  
 Memories of Dmitri Shostakovich", Harper & Row Publishers, 1979.

【画像出典】

Dmitri Shostakovich in His Uniform as a Member of the Leningrad Fire Brigade (1941) (goodizen.com)

年号	ショスタコーヴィチに関する出来事	時代背景ほか
1904年		日露戦争
1905年		血の日曜日事件、ポーツマス条約
1906年(0歳)	生誕	
1914年(8歳)		第1次世界大戦開戦
1917年(11歳)		ロシア革命(二月革命、十月革命) ラフマニノフ亡命
1919年(13歳)		ヴェルサイユ条約。ソ連内戦、干渉戦争激化
1922年(16歳)		ソ連成立
1924年(18歳)		レーニン没
1925年(19歳)	交響曲第1番作曲、レニングラード音楽院卒業	
1927年(21歳)	交響曲第2番「十月革命」作曲	
1929年(23歳)	交響曲第3番「メーデー」作曲	スターリンがトロツキーとの後継争いに勝利 世界大恐慌
1933年(27歳)		ヒトラー政権掌握、スターリン独裁強化
1936年(30歳)	「音楽の代わりに支離滅裂」にて名指して批判 交響曲第4番作曲も妨害により初演撤回	プロコフィエフ、ソ連に復帰。グラズノフ没
1937年(31歳)	交響曲第5番作曲 レニングラード音楽院に就職	ガーシュウィン没、ラヴェル没
1939年(33歳)	交響曲第6番作曲 ムソルグスキイ生誕百周年記念祭委員長	独ソ不可侵条約 独、ポーランド侵攻。第2次世界大戦開戦
1941年(35歳)	交響曲第7番「レニングラード」作曲	独、ソ連侵攻。レニングラード包囲
1943年(37歳)	交響曲第8番作曲、モスクワ音楽院に就職	ラフマニノフ没
1945年(39歳)	<b>交響曲第9番作曲</b>	独、日降伏、第2次世界大戦終結
1946年(40歳)	レーニン勲章、スターリン賞	
1948年(42歳)	ジダーノフ批判(芸術統制強化)の対象に モスクワ・レニングラード両音楽院を解雇	ベルリン封鎖 イスラエル建国宣言
1953年(47歳)	交響曲第10番作曲	スターリン没、プロコフィエフ没
1956年(50歳)	レーニン勲章	フルシチョフ、第1次スターリン批判
1957年(51歳)	交響曲第11番「1905年」作曲	人口衛星スプートニク1号打上げ成功
1961年(55歳)	交響曲第12番「1917年」作曲、交響曲第4番初演、 共産党入党正式承認(本人は不本意)	ベルリンの壁建設 第2次スターリン批判
1962年(56歳)	交響曲第13番作曲	キューバ危機
1966年(60歳)	レーニン勲章、社会主義労働英雄	中国、文化大革命開始
1969年(63歳)	交響曲第14番作曲	中ソ武力衝突、アポロ11号月面着陸
1971年(65歳)	交響曲第15番作曲	ストラヴィンスキー没
1975年(68歳)	モスクワで永眠	宇宙衛星アポロとソユーズ連結成功
1985年		ゴルバチョフ、情報公開・改革開始
1991年		ソ連解体

## ラフマニノフ 交響曲第3番



「どうやって作曲するのでしょうか？メロディーがないのに？それに長い間ライ麦のささめきも、白樺のざわめきも聞いていないのですよ？」

私事で恐縮ではあるが、私は社会人になり20年以上暮らした実家を出て東京で1人暮らしをしている。新しい根城での生活は決して悪くない、寧ろ快適である。一方で、ふと気づいたことがある。学生時代には微塵も感じなかったけれど、実は地元が好きなんだと。特に何かモニュメントがあるわけでもない、ありふれた街である。然し、一度帰ればどこか安心する。木々の間から零れる風の匂い、少し不気味な寺の陰、遠くにビル群が見える丘の上、全てが愛おしく感じられる。

言うまでもなく、生まれ育った環境はその人のアイデンティティの一部となる。世界の何処にいようと帰るべき場所になる。

そのような故郷への渴望は往々にして創造の活力になる。祖国ポーランドから亡命し、棺桶に入るまで帰郷が叶わなかったショパンのピアノ曲、アメリカに渡り祖国ポヘミアへの愛情を再認識したドヴォルザークの交響曲第9番。このラフマニノフの交響曲3番もそれに類する経緯を持つのではないだろうか。

1873年、セルゲイ・ラフマニノフはロシアのノヴゴロドに生まれた。自然豊かなこの土地をラフマニノフは心の底から愛した。ロシア正教会の鐘の調べを纏い、ライ麦のささめきと白樺のざわめきが共鳴するこの地で溢れんばかりの情操を育てていった。



イワン・シーシキン  
「ライ麦畑」

ラフマニノフ家は由緒正しい名家で、その始まりは15世紀のモスクワ大公国イワン3世の時代にある。セルゲイの曾祖父にあたるアレクサンドルはヴァイオリンを嗜みオーケストラを組織した。祖父も父も音楽を嗜み、その父に嫁いだ母リュボーフィもピアノの名手であった。このような背景があり、セルゲイ少年が音楽に触れるのは至極自然なことであった。



子供時代のラフマニノフ

母リュボーフィはセルゲイ少年の非凡なピアノの才能を見るや否や直接手ほどきした。めきめきと上達し、母の手では負えないレベルになると専属の講師を招聘した。その後父親の放蕩生活が祟り、一家はペテルブルクのアパートに移る羽目となったが、同時にセルゲイ少年はペテルブルク音楽院に入学した。然しこの学び舎は天才セルゲイ・ラフマニノフを育てるには荷が重く、彼のやる気を削いだ。そんな中、父の知り合いである新進気鋭のピアニストに腐っていた彼の才能を見出され、モスクワ音楽院へ入学することとなった。

彼の才能はここで花開いた。ピアニストとして順調にステップアップを進める中、彼が新たに熱を入れたのが作曲である。作曲においても類まれなる才能を持っていたラフマニノフはチャイコフスキーに見出され、彼の語法を吸収した。

交響曲1番の大失敗もあったが、ピアノ協奏曲2、3番や交響曲2番、そして数々のピアノ曲をこの世に送り出し、演奏家のみならず、作曲家としても大成していった。

ラフマニノフの特徴として際立つのはその旋律美である。そのメロディーは深く心に響き、感情の奔流を巻き起こす。彼のロシア時代の作品には、その魅力が詰め込まれている。そして、このアイデアの源泉は、彼が過ごしたロシアの大地にあったことは、その後の彼の運命を見ればよく分かる。

1905年、ロシアに衝撃が走った。ロシア帝政に不満を持つ民衆がデモを開催、その鎮圧の際警察が民衆に向かって発砲し何千人という死者が出た。元々日露戦争の敗退による経済悪化でロシア内部は荒れていたが、この事件が拍車をかけることとなった。強盗や殺人が横行し秩序は無きに等しかった。革命の余波で財産を殆ど失い、破産申告を余儀なくされたラフマニノフは、借金返済のため海外へと旅立つ決意をした。丁度その折、スウェーデンからの演奏依頼を受け、コペンハーゲンへ向かった。当初は一時的な避難のつもりだった。



1905年 血の日曜日事件

幾つかの楽譜と少々の携帯品だけを持って祖国を出たラフマニノフは狂ったように働いた。それは作曲家としてではなく、ピアニストとしてである。コペンハーゲンでの演奏会后、北欧で27回の演奏会を開催した。名声を高める中でアメリカ、ニューヨークから破格のオファーが届く。新たな活動の場を求め、このオファーにサインをした。1918年の秋のことであった。

自由と活気に溢れたニューヨークには当時のトップアーティストが結集していた。彼らのトップレベルの演奏に刺激を受けた彼はピアニストとして生きていくことを決めた。1918年12月8日のリサイタルから19年4月27日メトロポリタン歌劇場でのハイフェッツとのジョイントコンサートまで計36回、1919年/1920年シーズンは69回の演奏会をこなした。1919年/20年シーズンは69回の演奏会をこなした。1週間に1度以上のペースである。瞬く間に「世界的ピアニスト、ラフマニノフ」へと上り詰めた。



ピアニスト、ラフマニノフ

第一次世界大戦後のアメリカは空前の好景気であった。彼の負債はあっという間に完済し、衣食住で困ることはなくなった。然し稼げば稼ぐほど創作の時間は消えていき、かつてピアノ協奏曲2番でモスクワを湧かせた「作曲家ラフマニノフ」はセピア色に映った。

紹介が遅れたが、冒頭の言葉はラフマニノフがロシア脱出後、友人に「なぜ作曲をしないのか」と尋ねられた際の返答である。次のようにも語っている。

「ロシアを離れた時、私は作曲するという希望を捨てました。故郷を失った私は自身をも捨てたのです。音楽の源と伝統と故郷の土を失った亡命者には、心乱さぬ追走のかたくな沈黙のほかは、創作の希望もなければ、別の楽しみもないのです」

創作の時間がとれないという物理的な問題以上に、祖国から離れアイデンティティを失った彼に天は宝物を授けなかったのである。

西側諸国でどれだけ名声を受けてもラフマニノフは望郷の想いは捨てず、寧ろ時が過ぎる程にその想いは強くなった。アメリカ社交界には出入りせず、身近には常にロシア人をおいて日常ではロシア語だけを喋り、経済的な余裕ができてからはロシアの自然を思わせるようなニューヨーク郊外に邸宅を構え、同胞の亡命者を歓迎した。然しその想いに反して、ソ連と名前を変えた祖国は遠い世界となっていった。祖国に残してきた母に会うために何度も帰国申請をしたが認められなかった。遂に亡命から一目会うことも無く母リュボーフィは亡くなった。この死は彼に打撃を与え、反ソ連的発言も目立つようになる。これがソ連の反感を買い、ソ連内ではラフマニノフ・ポイコットまで起こった。祖国はもう帰るべき場所ではあっても、帰れない場所となっていた。

このような状況の中、祖国への愛情、尊敬、そして憧憬と悲哀を胸に集め、もう一度創作への意欲を見せる。その作品数はロシア時代に比べると少ない。オーケストラの為の曲としては「ピアノ協奏曲4番」、「パガニーニの主題による狂詩曲」、「交響的舞曲」そしてこの「交響曲3番」の4曲である。この時期の創作には以前の作品と比べると変化がある。彼の最大の魅力であるメロディーの支配は落ち着き、全体的に簡素なイメージを受ける。然し乍ら侘び寂びを携えた珠玉の作品群となっている。

交響曲3番は1935年から1936年にかけてスイスの別荘で作曲され、1936年11月6日に初演された。全体的に評価は不芳であった。ピアノ協奏曲の2番や交響曲2番程のキャッチーさはなく、聴衆には1度の演奏では十分に理解されなかった。批評家の意見も手厳しい。真新しさを求めるアメリカの批評家にとって、保守的な作風で書かれたこの曲は退屈に感じてしまったのだ。ラフマニノフはこの作品を最高のものと自信を持っていた為に、この評価には酷く落胆した。当時の心境についてラフマニノフは友人のアメリカ人にこう打ち明けた。

「あなたは、故郷を持たない人間への気持ちを知りえないでしょう、落ち着いて身を寄せるところのない私たちのような初老のロシア人がどんな気持ちでいるか、到底わからないでしょう、あなたの国全体の雰囲気からして、全然違うでしょう。いや、私はこれをあなたに説明することはできません。ロシアへの私の愛は口に尽くせぬほど強いのです。もし善良なアメリカ人たちに、私が何を感しているのかをわかってもらえないとしたら非常に残念なことです。しかし、はっきり言えることは、私はあるがままの自分を変えるわけには行かないということです」

この曲はまさに「母なるロシア」を高らかに歌った曲である。交響曲1, 2番の断片やロシア民謡を散りばめ、二度と戻ることができなかった祖国への愛慕を色彩豊かなオーケストレーションで精悍に描いている。

既に大国となり、祖国を失うことの悲痛、虚しさを知らないアメリカの上流階級に届くことはなかった。然しアメリカで時を



共にしていたロシア人の心には確かに刺さった。ロシア出身の指揮者アスラーノフはこの作品に関して賛辞の手紙をラフマニノフに送っている。彼がこの曲で真に願ったこと、それはアメリカで名声を得ることではなく、同胞と祖国を追懐し、想いを確かめあうことにあったのかもしれない。

1941年、ナチス・ドイツのソ連侵攻が開始された。祖国の危機を感じ取ったラフマニノフは同年11月の演奏会には「ロシア軍救済演奏会」と印刷され全収入をニューヨークのソ連領事館へと届けた。第二次世界大戦の間、彼は反ファシスト・祖国救済を掲げていたことが奏功し、ソ連でも彼を同胞の偉人として再認識されるようになった。祖国との蟬りは遂に解消したのである。



ラフマニノフは生涯現役を掲げ、病で倒れるまで演奏活動を続けた

運命とはなんと残酷なことか。彼を病魔が襲う。1942年肋膜炎と癌を発症、死期を悟った彼は祖国への想いを断ち切るかのように米国籍を取得した。そして翌年、彼は息を引き取った。意識が続く限り妻に毎日独ソ戦の状況を確認していたという。

現在、ラフマニノフはニューヨーク近郊の墓地で眠っている。そこではライ麦のささめきも白樺のざわめきも聞こえない。



ラフマニノフの墓

### 第1楽章 (Lento- Allegro moderato- Allegro)

青春時代の儂い煌めきを回顧するようなソナタ。荘厳なロシアの聖歌で曲が始まる。直ぐに仰々しい騒めきで掻き消された後、木管楽器による遠くを見つめるような息の長い旋律が紡がれる。その後のチェロによる芳醇なメロディーはまさにラフマニノフの真骨頂といえる。展開部は2つの主題が妖しく、滑稽に展開される。再現部では冒頭に回帰し、息をつくように曲が終わる。

### 第2楽章 (Adagio ma non troppo- Allegro vivace)

祈りと勇気ファンタジア。再び聖歌の動機で始まるが、今度は独奏ホルンとハープが静かな幻想の風景へと導く。この交響曲は全部で3楽章と伝統的な形式からは外れている。然しこの第2楽章が緩徐楽章とスケルツォを兼ねることによって全体の一応の体裁を保っている。これは同時代の作曲家、シベリウスがよく用いる手法である。結果、この楽章では夢見るような慎ましさと、渦巻く気まぐれな精神の間で目まぐるしい対比が生まれている。最後には聖歌の動機が三度包み込み、行き場を失った想いを慰める。

### 第3楽章 (Allegro- Allegro vivace- Allegro (Tempo primo)- Allegretto- Allegro vivace)

ロシアの舞踏を思わせる生き生きとした祝祭歌。冒頭は1楽章でもあった騒めきによって始まる。野性的で血沸き肉躍る音楽が落ち着くと、ファゴットにより惚けたメロディーが呈示され、この主題をもってフーガが展開される。万華鏡のような風景の移り変わりがあり、最後はシンプルにあっけなく終わる。

(薄井潤一郎)

#### 【参考文献】

2003年ニコライバジャーノフ著、小林久枝訳 ラフマニノフ：伝記 音楽之友社  
2012年一柳富美子著 ラフマニノフ：明らかになる素顔 ユーラシアブークレット

#### 【画像出典】

<https://ja.m.wikipedia.org/wiki/セルゲイ・ラフマニノフ>  
<https://ja.m.wikipedia.org/wiki/イヴァン・シーシキン>

# Member

常任指揮者：齊藤栄一      コンサートマスター：小染慶

## 第1ヴァイオリン

阿部優太  
落合佑香  
落合友佳里  
加藤峻一  
小井土史織  
◎ 小染慶  
小林奏詠  
近藤和  
高杉暁音  
田村奈津子  
前澤郁弥  
村部一星  
森勇人  
劉守珩  
渡邊梓

諸岡咲良  
藪野三音奈  
山本妃奈乃

## ヴィオラ

伊奈裕貴  
大澤愛紬  
大野厚  
小川雄成  
小原裕美  
高岡広太郎  
◎ 高橋熙  
松井歩  
宮崎春菜  
山本祐希奈  
渡部友賀

## コントラバス

上野未夢  
片山朔杜  
草山雄杜  
◎ 小島辰仁  
清水樹  
鈴木和奏  
長屋裕大  
盛田明雅  
米山宏祐  
和田輝羽

## フルート

井上弘誠  
今城琴美  
高田颯音  
◎ 滝原真琴  
牧野美空

## オーボエ

◎ 菅野勇斗  
黒川達郎  
小島みなみ  
寺田晴香  
山本菜緒

## クラリネット

越智健介  
小林桃子  
田中秀和

## 中田彩夏

◎ 山岸雄作  
吉田紗雪

## ファゴット

伊藤綾香  
◎ 薄井潤一郎  
久村友理奈  
野口滉太

## ホルン

池水香穂  
大沼菜摘  
大場祐香  
片山銘弥  
金井彩音  
清水颯太  
平井美冬  
◎ 満石卓斗

## トランペット

倉林佳祐  
◎ 神山優美  
櫻木こころ  
清水星那  
中瀬涼太

## トロンボーン

青木俊輔  
鈴木亮太郎

## 星野宗隆

◎ 前澤志歩

## テューバ

井上拓

## パーカッション

◎ 安西理玖  
小林大治朗  
小山太一  
高橋奏良  
箱田健太  
茂木沙織

## サクソス

神谷航介  
◎ 佐藤直人  
原口純也  
福島知浩

## ハーブ

東森真紀子

## チェレスタ・ピアノ

清水樹土

◎：パートトップ

## 第2ヴァイオリン

荒金香帆  
岡田莉沙  
岡村昂洸  
片岡拓巳  
片山なつみ  
佐藤直人  
清水花凜  
高原苑  
◎ 田代新  
中野宏亮  
平野愛莉

## チェロ

稲葉理乃  
内田夏音  
金澤直人  
金子将翔  
川人敦  
木田萌子  
須藤ひかる  
長谷彩香  
◎ 原田大成  
舟橋星浦  
松本紗夜  
吉海拓真

## トレーナー（敬称略）

内山厚志  
野口博司  
林憲秀  
古野淳  
柳澤崇史  
山田裕治

## フライヤーデザイン

牧野美空  
水本紗恵子

## パンフレットデザイン

水本紗恵子

## 運営委員

委員長  
清水颯太

## 委員

安西理玖  
菅野勇斗  
小島辰仁  
小染慶  
野口滉太  
山岸雄作



Youtube

Mail : [essenz.philharmoniker@gmail.com](mailto:essenz.philharmoniker@gmail.com)  
X (旧 Twitter) : @Essenz\_phil

[発行] 2024年2月4日(日)  
[編集] エセンツ・フィルハーモニカー

※無断複写・転載などを禁じます。